失われるもの、遺すもの

Lost and Inherited

建仁寺塔頭両足院　副住職

伊藤東凌　インタビュー

Toryo ITO / Vice chief priest of Ryosoku-in

聞き手：菱田吾朗、中村文彦、野間有朝、渡邊雅廣、春日亀裕康
2019.7.30　於 建仁寺塔頭両足院

建築史家

井上章一　インタビュー

Shoichi INOUE / Architectural historian

聞き手：菱田吾朗、中村文彦、野間有朝、渡邊雅廣
2019.8.2　於 国際日本文化研究センター

様々な歴史が重層的に堆積してきた京都。
変化し続ける都市のなかで何が失われ、これから何を遺していくべきなのか。
今後の京都について改めて考えるべく、伊藤東凌氏、井上章一氏の２人にお話を伺った。

四条大橋から北を望む（写真：新 靖雄）

建仁寺塔頭両足院　副住職　伊藤東凌氏に聞く

建仁寺両足院の沿革

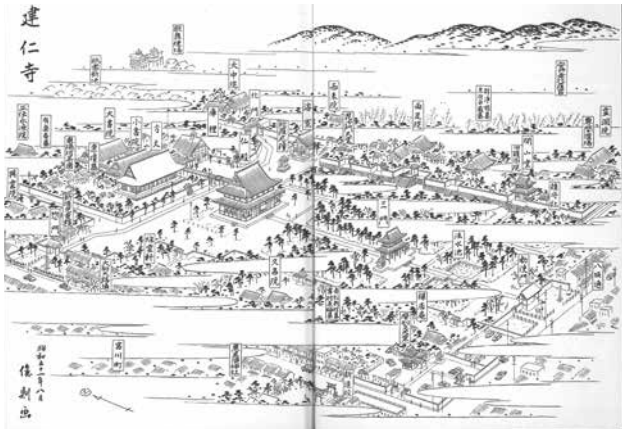
── 最初に、建仁寺全体や、その塔頭である両足院の建立の経緯、さらには現在に至るまでの流れをお話しいただけますか。

伊藤 ── 建仁寺は京都でいちばん古い禅のお寺です。1202年に建てられた当時は、禅を専門にしたお寺は許されていなかったので、天台宗、真言宗、禅宗の三つを合わせて学ぶ､総合大学のような形で建てられました。それから50年ほど経って、９代目の住職が入ったときに、純粋な禅のお寺になりました。住職が50年で９人も入れ替わるほど昔は任期が短かったのですが、位の高い僧侶を呼び寄せたあと、その短い任期が終われば無関係になるわけではありません。境内の中にまた新しくお寺を建てることで、弟子たちがその教えを継承していきます。これが建仁寺の塔頭である両足院のような、塔頭の起こりです。両足院の場合は栄西さんが眠っており、修行の際には非常に神聖な場として拝まれていました。また、経蔵というお経の蔵もありますが、ここも特別な役割で選ばれた人しか住めない所でした。そのようにして、大寺院の中に小寺院が建てられ、住まい、あるいは学問所のような機能を果たしていました。両足院は建立当初、知足院と名乗っていましたが、あるときに知足院の全体を二つに区切って、護国院と両足院に分けました。ですからこの時点で境内の区画が整理されています。

── 鎌倉時代に遡るほどの歴史をお持ちですが、応仁の乱など数々の災害に遭っているなかで、現在まで残っている建物はあるのでしょうか。

伊藤 ── 両足院にはありません。建仁寺全体で見ても勅使門だけが創建当初のものだったと思います。建仁寺は七つのお堂が主要な建物として並ぶ、七堂伽藍という形式ですが、寺領の大きさは創建当初から変化しています。初めに与えられた七堂伽藍のエリアから、時代を追って塔頭などが次々と建立されるにしたがって寺領が拡大していき、いまの四条通のあたりまでが寺領でした。

伊藤東凌氏（右）を囲んで



建仁寺の境内鳥瞰図[1)]

賑わう花見小路

周辺のまちの変化

── 四条通あたりまでが境内だった明治維新ごろの状況から、周りのまちとの関係のなかでどのようにして現在の状況まで変わっていったのでしょうか。

伊藤 ── やはり明治時代になって、廃仏毀釈が行われたことが大きいです。住職が常駐していない寺院が取り壊されたことから、江戸末期には 60 軒くらいあった塔頭寺院が、いまでは 14 軒まで縮小しています。そのなかには極めて重要な文化財を持っているお寺もあったので、例えば両足院も何軒かお寺を合併しており、合併することで残せる文化財はできるだけ残しながら縮小していきました。

京都市としても、お寺が土地を持っていると全く税収にならないのに対し、いわゆる繁華街なら税収が上がるということもあったでしょう。建仁寺と祇園や宮川町のように、寺院と花街は立地的に近接していることが多いです。舞妓さんに支払うお金のことを花代、線香代と呼んでいたことからもわかるように、お寺参り、お墓参りとあわせて遊びに来ていたんです。やはりお参りが衰退していったなかで、遊びとの連動で信仰を再び盛んにすることを、お寺側も受け入れていた可能性はあります。

── 明治維新のときに現在に近い規模にまで縮小したあと、それまで建仁寺の境内だった所では、どのようにまちづくりがなされてきたのでしょうか。

伊藤 ── 花街はもちろん、寺町としても機能した要素があるので、草履屋さんや畳屋さんなど、いわゆる伝統文化に関連するお店はひととおり揃っていました。お寺が品物を注文しやすいこともありますし、お参りに来たお客さんがついでに買っていくこともあったでしょう。ろうそく屋さんや花屋さんなども数多くありました。いまはそれらも経営難に陥ったり後継がいなかったりで、残念ながら多くがコインパーキングになってしまいました。

明治維新で一気にお寺が縮小してもなお、比較的広い境内がありましたし、経済的な理由もあったのか、お寺の境内でも空いている所を貸していたことがわかる明治時代の図面もあります。そこにも現在は民家が建っていることが多く、西側や南側の道路からは、建仁寺を囲う塀は見えません。その意味ではさらにもう一段階は小さくなっているといえます。境内のいちばん端になる部分の多くを譲渡してしまったような形です。

文化財としてのお寺の保存

── 建仁寺は伝統的建築や文化財の点で重要性が認められているお寺だと思いますが、保存に関しては現代に何を残すべきか、それをどのように残すべきか、という問題があると思います。

伊藤 ── 99.9％変えずに残すべきなのは、両足院でいえば本堂と正門だけかもしれません。建仁寺の650年の歴史において、最初からすべての建物が揃っていたわけではありません。先に述べたように、時代の変化に伴って追加されたものや建て替えられたものもあります。それは今後についても同じことでしょう。例えば、いまは朱印を求める人がかなり増えました。建仁寺にはありませんが、朱印を授与する専門の場所を、プレハブなどで新しく用意しているお寺もあります。両足院でも、一般の人々が飲食できる場所を新たに設けることを検討しています。いままでお寺のなかにそのような場所はありませんでしたが、人々の食への関心が高まっている現代ですから、食を通じて禅のエッセンスが感じられるような場になればと考えています。

やはり改めておもしろいと思うのは、建物と庭の関係です。被災して建物が更新されても、庭はほぼそのまま残ります。それが数百年繰り返されていくと、庭だけが重厚な気配を孕んでいくので、更新される建物は、中から見る庭の景色の印象を損なわないようなもの、具体的には同じサイズ、素材のものになります。一方で、これを変えながら、庭の景色の美しさを変えないというのはとても難しいと思います。私もまだ考えが及びません。とりわけ現代においては、お堂のプロポーションと身体性の関係が問題になります。椅子に座って見る庭の景色は畳の上に座って見るときとは変わってしまいますし、椅子に座るなら、天井をもっと高くしたほうがいいかもしれません。また、人間の体つきも、現代と昔とでは少し違うはずで、参拝する人も日本人だけではなくなってきています。そうした人間の身体性の変化にあわせて新しくつくると、これまで守られてきたお堂特有のプロポーションが崩れてしまうんです。

── 建仁寺を建築物として実際に修復していくときに、例えば伝統工法としてつくられたものが直せない、あるいは壊れてしまった部分をどの時代のものでどう作り変えるかなど、技術的な問題や時代性の問題はありますか。

伊藤 ── 例えば、建仁寺の本堂の屋根は、5年前に銅板葺きから柿葺きに修復されました。私が子供のころから見てきた景色は銅板だったのですが、やはり400年前は柿葺きだった、ということで直されました。銅板は戦後、いろいろなお寺で信仰のように流行り、とてもいい技術だと持てはやされていました。でも結局穴が空いてしまったり、緑青も完璧に美しい状態にはなかなかならなかったりで、いまはむしろ避けるべき素材になりつつある気がします。そういう修復のしかたのトレンドみたいなものはあります。

建物が災害で壊れてしまったり、見えない部分がいつの間にか老朽化していたりすることは昔からよくあります。そうした際にはある工務店一社に飛んできてもらって修理してもらうのですが、これを繰り返していくと、応急処置だらけになってしまいます。理想的には、30年後、50年後どういう姿でありたいかを考えた上で、うまくお金を使っていけたらいいのですが、そのように変えながら残していくのはわりと難しいことだと思います。やはり、財政状況はお寺の建物の保存に関して決定的な要因ではあります。

お寺の社会的役割

── 近代以前のお寺は社会にとって、どのような存在だったのでしょうか。

伊藤 ── 昔は学校も美術館も博物館もありませんでした。そんな時代にもお寺には芸術品や書物が蓄積されていたので、文化や芸術や学問を学ぶために人々が集まってくる場所だったといえます。例えば建仁寺は五条坂の陶芸家とのやりとりが多く、お寺にある陶芸作品のみならず、張瑞図という書道家の書を、ある陶芸家に貸したという記録が残っているなど、ジャンルを超えて関わりが生まれる場所だっ

たともいえるでしょう。

また、建仁寺のような大きなお寺は、幕府のはたらきを一部担う役割も持っていました。昔の朝鮮通信使の応接係にお坊さんが選ばれていたのは、当時もっとも漢文に優れていたのがお坊さんだったからです。学問に優れた僧は、政府から碩学録という録を授与されることもありました。つまり意外ながら、民衆に開かれていたというよりは、きちんと幕府や藩とつながってしかるべき仕事をしていたともいえます。お坊さんを大名のもとに派遣して、漢詩や連歌などの指導にあたらせながらコネクションを強め、その大名から金銭的に援助してもらうこともあったと思います。

── いまとは全く逆で、政治と宗教とがあまり切り離されていなかったということですね。武家をもてなすために庭の文化が発達したように、お寺にはもともとなかった機能などが、政治勢力との関わりによって生まれたものはありますか。

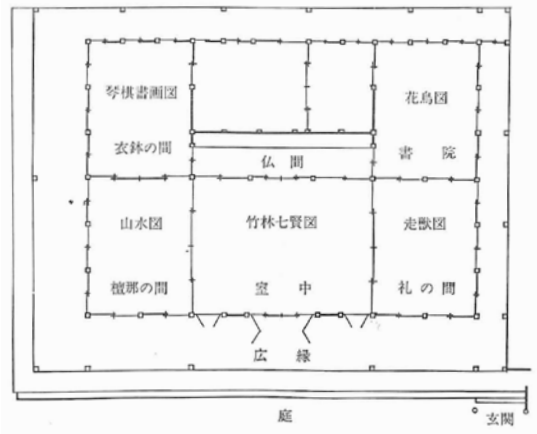
伊藤 ── 例えば、本堂は客殿とも呼びますが、方丈といって6つの部屋に分かれています。客人をお迎えする際には、最初は入口の間で全員荷物を置いて休んでもらい、主客だけを真ん中の部屋に案内し、少しもてなします。このときのお茶のふるまい方が茶礼と呼ばれ、茶道の源流になっています。そうしてさらに奥の方へ入っていくのですが、部屋ごとに移動していくことでそれぞれに意味付けができます。すると、例えばどの部屋のどの位置に絵を飾るかを決めることを通して、部屋の設えが変わっていきます。このように、やはり人々をお迎えすることで文化が生まれているといえます。困った人がただ駆け込むためだけのお寺だったら、お坊さんになりたいと思う人もあまりいなかったかもしれません。でも当時はそうではなくて、位の高いお坊さんがしていたのは、賓客を招いて接待するという、外交官のような華のある仕事でした。

── 京都のお寺は特に、観光スポットとして見られることが多いと思います。京都のまち全体も観光都市としての側面が強くなってきていますが、これについてどのようにお考えですか。

伊藤 ── 人が来ることで、我々に新たな気づきが生まれ、改善されていく点も多いので、非常にいいことだと思います。現代人は何に悩んでいて何を求めているのかを、私もお寺を案内しながら対話をするなかで見つけていき、現代でのお坊さんのあり方を見つめ直すチャンスを得ているといえます。もちろん拝観収入を得られているという部分もあります。

一方でよくない側面もあります。拝観人数をどのように管理するのかなど、一般の会社と変わらないような仕事に労力をとられてしまうので、ストイックに一生涯かけて勉強し、力を磨いていくような昔ながらの文化は薄れてしまいました。その代わりに、いまは人々にきちんと関わる機会があるという点ではいいと思います。

お寺は観光のために開かれていくべきだとは思いますが、静寂や伝統を感じながら、普段とは異なる気分になるための場所が、ただ開けるという形にしてしまうと騒がしくなってしまうかもしれません。ゾーニングなど、特に建築的なアプローチを含めながら、閉鎖性と開放性を丁寧にコントロールできると、静寂を保ちながらも、活気もある場所になると思います。



方丈の平面図 [1)]

観光都市とどう向き合うのか

── 花見小路など、建仁寺周辺のまちには伝統的な景観が残っていますが、この景観はもともとあったはずの生活や文化と切り離されてしまい、外側だけが残されているようにも見えます。こうしたなかで、どのようにまちを保存していくべきだとお考えですか。

伊藤 ── まちという単位では真剣に考えていなかったかもしれません。でも、やはりいちばん残したいのは「丁寧さ」ですね。果たして何が丁寧なのかというと、例えばものづくりの丁寧さや、暮らしの丁寧さなどがあると思います。

多くの町家がショップにリノベーションされていますが、町家のなかだからこそ、ハイブランドが入ってきても、どんどん数を売ればいいという見せ方ではなくて、品物を作る過程など、本質を見せるような構えになると思います。ただ、必ずしも町家がないと丁寧さが残らないわけでもありません。例えばマンションに住んでいるおばあちゃんでも、毎日料理を３食作るような暮らし方は、我々現代人からすると丁寧だなと感じます。

── 歴史建築物のハード面をどう残すか、どの年代のものを残すか、あるいは現代的にどう解釈するかといった話を私たちは考えていたのですが、そこで営まれる生活の「丁寧さ」という視点はとても示唆に富んでおり、本質を突いている気がしました。

伊藤 ── 丁寧さというときに忘れてはいけないのは、人と人とのコミュニケーションだと思います。便利になった現代では、リアルなコミュニケーションは最低限になり、デバイス上でのやりとりがメインになりつつありますが、人と人とが顔を向け合って、人と人との距離感をきちんと取れるような建築やまちの姿であってほしいんです。京都性や京都らしさとはどこにあるのかと考えたときに、「丁寧さ」はひとつ言い当てているように感じます。

これは禁止です、あれも禁止です、というようなサインばかりが増えていますが、今後もその傾向を止めるのは難しいかもしれません。でも本当は、例えばお寺に足一歩踏み入れたときに、「明らかに丁寧な場所だから、丁寧にふるまわないといけないな」と自然に思えるようになるべきだと思います。お寺だけではなく、京都のまち全体がそうなれば本当にいいと思います。

建仁寺北門から花見小路を見る

RYOSOKU　禅寺食堂・売店　これからの禅寺の景色を支える「器」（写真：RYOSOKU pc: 奥山晴日）

現代都市におけるお寺

── 日本人の信仰心が薄れてきている現代、さらには今後のお寺の存在意義について、どのようにお考えですか。

伊藤 ── どうしても私の場合は人に焦点を当てて話してしまうので、現代の生活様式や現代人に対してどういうものを発信するかという目線でお話しします。

「眺める」という作法を大事にしていて、この作法自体が日本人もできなくなってきているように思います。スマホを見てパッと判断するのではなく、ぼーっと景色を見ている間に、その景色にだんだん自分を重ね合わせたり、過去の自分を思い出して勇気を取り戻したり、ささくれだった心が別の何かに繋がったり。そうしたときに人は、もっと広い視点でものを見られるようになると思うので、眺めるという作法をきちんと実践できる場をつくっていかないといけません。美術館や学校などでも、いい施設はできているとは思いますが、その中で枝や木々の移り変わりや光の現象の変化を感じてほしい、まさに眺めてほしいんです。そして、分厚い壁で区切られていたような自分が、そういえば自然の一部だったんだなと、溶け込むような感じで自分の感性を取り戻せるような場所として機能していくべきだと思います。

これは普遍的な話で、昔は上層階級だけが受け入れの対象でしたが、やはり誰しもそういったものは普遍的に必要でしょう。もう対象は日本人だけとも限らないと思います。

── 現在、両足院で行われているお墓のプロジェクトは、どのようなものでしょうか。お墓は亡くなった人のためのものであると同時に、生きている人のためのものでもあると感じます。

伊藤 ── お寺のなかには渾然として死と生があるべきだと考えていて、そのモデルとして大昔の集落のようなものを考えています。集落では、埋葬場所が村の中心にあり、そこで皆で集会をしたり、祭りをしたりしながら生活していると、死がいつも自分事だと思えたはずです。いま、まちを考えるときには、死を不浄なものだと見なし、とりあえず端の方に置いておきます。まちを本当に集落化することは無理ですが、この両足院のなかだけでも、そうした集落モデルのようなものを取り戻そうとしています。例えば精神修行は深い山奥で、食事は賑やかな派手な場所で、というようにバラバラになるのではなく、お寺に全てが混然と入り混じっているほうが、気づきがあると思います。お寺をまちなかにある集落のように機能させて、飲食のような生に関することと、死に対する祈りや供養を、人々になるべく近く感じてほしいと思います。どんな食べ物を出すのかについては、まだはっきり定まってはいませんが、他のレストランなどとは違うもの、いわゆる従来の精進料理をベースに、それを食べながら自分の親や先祖のことを思い出せるようなものがいいなと思います。

── 両足院ではほかにもアーティストの方を呼ばれてイベントをされていますが、これはどのような考えで行なっているのでしょうか。

伊藤 ── 現在のお寺が昔のものを保存するだけの場になりつつあるなかで、昔のような文化創造の場としての役割をもう一度取り戻すべきだ、という意識がありました。例えばプリンターの技術も上がったので、掛け軸のレプリカを何幅か作ったりもしていたのですが、これでは新しい芸術は生まれないと思いました。つまり、自分たちの哲学性やテーマを芸術家に表現してもらって教えを広めるための芸術なのに、数百年前のものの複製を重ねていくのは非常にもったいないと思ったんです。できるだけ芸術家を招いて、きちんと対話を重ねて、様式にも縛られず、現代的に読み替えていくことを心がけています。例えば、単純な掛け軸を作るのではなく、「かける」という概念だけは変えなければいろいろなことができます。大事なのは対話の密度です。これがないと、芸術家に場所を貸してただ置いただけの一時的なもので終わってしまうと思います。

これは建築にも通じていて、現代の建築家ときちんと話し合ってつくろうとはお寺もなかなか思いません。先ほど述べた食事を出す新たな試みについても、イベントでいろいろと試し、対話の機会を作ることでリサーチに磨きをかけていきます。仮設的に試さずにいきなり建物を建てたら、見た目としては綺麗でも、思想の伴っていないものになってしまうのではないかと思います。お寺だから、もしかしたら京都だからか、無理に急いでつくろうとせず、どちらかというとクオリティに対して意識が向くんです。これは厳しくもあり、ありがたくもあります。きちんとクオリティの高いものをつくることができれば受け入れてもらえる。急いで適当にやってはなりません。

建築や芸術に関して、もう一点重視しているのは縦軸と横軸です。まず縦というのは、場所の持っている歴史のコンテクストです。これが京都には相当蓄積されていて、どの時代のものがベストか考えた上で、複数のコンテクストを折り合わせられます。芸術作品をつくるときにも、例えば 200 年前、400 年前、800 年前と三つのコンテクストを盛り込むようなことが簡単にできるのは強みです。そして横というのは、まちのスケールが小さいので、例えば草履屋さんはすぐそこにいるとか、数 km 先にいるとか、いろいろな技能を持った人たちがひしめきあうようにいるので、何かやろうと思ったときに皆がすぐに会えてしまうというような話です。

やはり、結局は納得して続けられることが大事だと思います。続くことを大前提とした考え方がここまで強いのはやはり京都だけではないでしょうか。とりあえず 3 年間はこのビジネスで回しておいて、また立て直して、というような発想はまずしないと思います。続くことで、人々に受け入れてもらえる、まちに溶け込んでいけると思います。きちんとまちに根付かせようという狙いを持って丁寧にやる。失敗することもあるとは思いますが、コンテクストをしっかり丁寧に拾いながら、横のことも意識しておかないとサスティナブルなものにはなりません。目先の話題性や利益に気を取られることなく、縦横を意識して気持ちがいいようにつくらなければいけないと思います。

また、京都には丁寧な暮らし方をしている人が多くいるように感じますが、それをわざわざ自分では外に広めようとはしません。特にご高齢の方にとっては普段の生活の一部として当たり前に行なっているようなことが、海外の人からしたら貴重な価値があります。新しいものに対してもあまり嫌がらず、聞く耳を持ってくれる人は多くいらっしゃるので、まちに愛されることを前提にしながらも、海外の方々を主なお客さんとしてもてなすような形で融合を実現できると思います。まさにこれが横を意識するということだと思います。そして、さらに歴史的な調査も行ないながら、縦の意味も込めていければ素敵だと思います。

1966 年の七条通と下京一帯 [2)]

建築史家　井上章一氏に聞く

日本の街並みの系譜

── 現在と比べると近代以前には、例えば京都では京町家がずらっと並ぶような、統一感の強い街並みが維持されていましたが、これにはどのような要因があるのでしょうか。

井上 ── 江戸時代には、家作制限という決まりがありました。幕府が設けていた、建築についての統制令です。まちによって若干差はあったと思いますが、多くのまちで街並みは事実上統制されていました。特にお商売をする町家や町方は、２階建てより高いものを建てることが認められませんでした。その２階も、表側では虫籠窓にすることを強いられました。侍を商人風情が見下ろすなどということはあってはならないという、一種の身分意識がそうさせました。

例えば直轄地の江戸では、ここは商人の居住区、ここは武家の居住区と、街区が分けられたんですね。そのため、ひとつの居住区には、いくらかズレはあるけれども、だいたい同じデザインの建物が並ぶこととなります。幕府に美しい景観をつくろうという意欲があったと私は思いません。幕府にあったのは身分のわきまえを、身の程を知らせるということだったと思います。だから住友とか三井でもそういう制限の下で自分の店をこしらえたんですよ。今のまちなかでいちばん大きい建物を建てるのは間違えなくブルジョワジーです。金融オフィスなどがいちばん立派なビルをこしらえます。こんなこと、江戸時代ではあり得ないです。まちの金貸し風情がなにを傲慢な振る舞いに出ているのだ、と江戸幕府なら考えたでしょう。決定的なのは、明治維新の四民平等政策によって、身分秩序に関するこだわりがなくなったことです。そのおかげで商人たちは建築的な自意識に目覚めるんですよ。もう幕府の統制はない。自分はこんなふうに店を構えたい。そう考える商人たちによって、どんどん街並みの統一感は崩れていきます。このとき、ある種のブルジョワ革命が起こったんだと私は思っています。フランス革命の前後でこういう建築史の変化はありません。だからフランス革命以上に明治維新のほうが、少なくとも建築の見た目を見れば、変革は急進的だったと私は考えています。

── ヨーロッパの建物は石造が多いのに対し、日本の建物は木造が多く、メンテナンスの文化とともに残ってきた部分もあると思います。日本において建物の寿命が短い中でどう残していくかはやはり難しい問題だと思います。

井上 ── 石造と木造の問題にお答えします。確かに木造は寿命が短いです。だけど 20 世紀に入った頃から、都道府県庁舎はどこでも、石かレンガでこしらえるようになっているんです。その初代の石かレンガの庁舎をいまだに使い続けている自治体はほぼないです。東京都庁は 4 代目か 5 代目じゃないかな。それはフィレンツェでパラッツォ＝ヴェッキオを 700 年保っている人たちと全然違うと思います。イタリアではけっこう地震が起こります。他人事ながら心配でもあるんだけど、このあいだの地震でアマトリーチャのまちがほぼ全壊したんです。だけど、アマトリーチャの人たちは前と同じものをつくりだしているんですよ。風景が変わることを嫌がっているんだね。

── 統一された街並みには、木造で低層のものしかつくれないというような、当時の技術的な未発達さも影響していたのではないかと考えているのですが、その点についてはどのようにお考えでしょうか。

井上 ── 豊臣秀吉が制圧していた大阪には 3 階建ての町家がありましたし、比較的背の高い蔵がそう多くはないけどありました。豊臣秀吉は成長するブルジョワの勢いを無下にはねつけようとはしなかったんだと思います。しかし、身分秩序を押し付けたのは、江戸幕府です。技術的に 3 階建てや 4 階建ては可能だったと思います。安土城は 7 階建てです。明治 10 年代の終わり頃には、大阪に 9 階建の木造建築ができています。技術的に木造だから 2 階建て以下にしなければいけないわけではなかったと思います。もちろん鉄筋コンクリートほどの強さはないんだけれども、2 階建てで抑えられてきた歴史を木造だからという事情だけで語るわけにはいかないと思います。

── 西陣には織物のコミュニティがあるように、地域ごとに特色ある産業があって、ある程度生業が統一されていたことが、街並みの統一感にも関わっているのではないかと思いました。そのように当時は職人や商人の生業のためにあった町家が、現在は観光用にカフェやホテルなどに代わっていくことがよくあると思います。

井上 ── 一般的ないわゆる町家は、お店を出すように想定されています。でも、僕には西陣の職人住宅と、中京区辺りにある商人の家とは、パッと外から見ただけでは区別しきれないです。もし職業によって、家屋が大きな影響を受けるところがあるとすれば、それは間取りじゃないかな。家の中に入れば、これは機織り機のためにこういうふうにしているな、というのが見えてくると思うんだけれども、外から見る限り、そう顕著には見えないように思います。というか、いまでも外観で中の仕事ぶりが分かる建物はそんなにないんじゃないのかな。パチンコ屋とラブホテルははっきり外側だけでわかるけれども、他に何かありますか。

京都人の精神性とまち

── 井上さんが著書で述べられているような、京都人の精神性とまちづくりの関係についてお聞きします。近代には、番組小学校を住民でお金を出しあってつくっていたと聞きますし、三条通辺りにある近代建築なども、かなり上質なものをつくろうという精神が感じられるのですが、これについてはどのようにお考えですか。

井上 ── いまはだいぶ見る影がないと思うけど、1920、30 年代くらいまで、京都のブルジョワは本当にお金を持っていたんですよ。よく大正時代にあんなものをこしらえたなあと思うんだけれども、室町通の明倫小学校には、音楽の授業用に、ペトロフのグランドピアノが置いてあったんですよ。私は京都の嵯峨の小学校を卒業しましたが、嵯峨小学校にはたぶん、オルガンはありましたけどアップライトのピアノもなかったような気がします。だからやはりお金を持っていたんだなと思います。町の会所に集まって、町のことを決めるという、市民自治の伝統はあったと思いますし、それが働いたんでしょうね。

京都人の精神について、祇園祭を例にとってお話しします。江戸時代の祇園祭をイメージしてください。ダークなトーンの町家が並んでいます。その道の真ん中を、赤やら黄色やら緑やら、原色と金色に彩られた、鉾や山が通って

いくわけです。いちばん背の高いものは鉾なんですよ。いちばんカラフルなものも鉾であり山なんですよ。だけどいま、いちばん背が高いのは周りのビルですよね。いちばんカラフルとまではいわないけれども、つるつるしたピカピカしたビルが周りに建っているわけです。かつてと風景が違う。町衆の人たちは、後の祭りを復活して、伝統により忠実にやろうという気構えを示しているけれども、もうあのビル街ができた時点で、かつての祇園祭と同じ祭礼ではないと私は考えます。鉾と山のいちばん輝いていた時代は偲べないわけじゃないですか。だけど、そのことを一切気にしていないらしい町衆にあるのは、やはり利潤を求めるブルジョワ精神なんだろうなと思います。保守精神、つまり伝統を守ろうという気構えは、鉾と山とパレードにだけは向かうんだけれども、舞台背景である街並みに関しては興味を持っていないと思いますね。

祇園祭と四条通の街並み（写真：新 靖雄）

伝統の保存と更新

── 江戸時代のものをそのままそっくり再現しても、現代では全く違うものになっているという話だと思いますが、文化財などの修復についても、そのまま残していくという冷凍保存的手法では、テーマパーク化、オブジェ化してしまう問題もあると思います。

井上 ── おっしゃるような部分はあると思いますね。いま、パリで問題になっているノートルダム寺院の焼ける前の姿だって、19 世紀の終わりごろに改変されたものです。古くからのノートルダム寺院がそのまま残っているわけではないし、ヴィオレ＝ル＝デュクの思い描いた中世を投影している部分はあると思います。いまの祇園祭の鉾と山だって、最近よみがえらせたものもけっこうあるんだけれど、おそらくどれをとっても、江戸時代の鉾や山よりゴージャスになっていると思います。可能な範囲でいちばん立派そうなもの選んでいるんでしょう。だから、本当に数百年間冷凍保存するという保存のあり方はあり得ないですよね。そりゃ変わっていくもんだと思います。伊勢神宮だって、遷宮ごとに変更はあると思いますよ。

京都の洛中の人たちは 300 年、400 年続いた商いを保っていらっしゃいます。しきたりや習わしにうんざりすることもあるだろうし、近所づきあいも煩わしいでしょうね。古くからのお得意さんも扱いが大変なんです。そんな伝統にがんじがらめになっているのに、建築に関してはけっこう近代的なんです。うんざりした部分の捌け口が建築方面に出ているのかもしれません。まちなかの織屋の跡取りが高松伸に設計を依頼したり。あれは鬱憤晴らしなんじゃないかなと思います。結局、建築文化を侮っているんだろうね。

ただ、京都にはお寺がたくさんあるし、裏千家や表千家をはじめとするお茶の家元もいらっしゃいます。例えば、壁をつくるときに、竹で小舞をつくって、練り土をこねていくという左官仕事は、京都があるから絶滅せずに済んでいるんですよ。いや、他のまちで絶滅したとは言わないけ

れども、こんな仕事を頼む施主はほぼいなくなっていると思います。忠実な技術の伝承は本当に難しいし、ありえないことだと思います。正確な伝承ではないにしろ、とりあえず補修をする職人や業者が仕事を続けていけるのは、寺や千家、御所、離宮なんかが京都にあるおかげだと思います。これは景観保存以上に、職人技術がかろうじて温存できるというような意味を持っている、と私は考えます。それが本質的に大事なことなのか、もっと介護老人施設を充実させるべきだといわれたら、私は勝つ自信がありません。それはもう建築方面の道楽でしかないといわれれば、そのとおりであると思います。でもかろうじていえることは、イタリアなんかは国を挙げてその道楽を続けているらしいよと、つぶやくぐらいですね。

美しい景観とは

── いまの京都には、古都のイメージがつけられて、景観デザインもそのイメージを目指しているのかわかりませんが、統一感のある街並みをつくろうという流れがある気がしています。

井上 ── 私、大学の 3 年生のときに地中海沿岸をまわったんですよ。そのとき、特にフィレンツェは衝撃で、700 年間使い続けている市役所があって、まち全体が博物館のようになっていました。それで日本へ、京大へ帰ってくるじゃないですか。近代建築の保存運動なんかをやっている人に対して、京都の近代建築の一つや二つ保存して何の意味があるんだと思ってしまいました。一つひとつはそう大した建築でもないわけじゃないですか。あれは、連なって街並みをなしているところに意味がある、と私は考えます。近代建築の保存運動は、いまは知りませんが、私の学生の頃はほぼ連戦連敗でした。オーナーや企業に、維持し続けてくれという要望書を出しても、大概ははねつけられるわけですよ。はねつけられて、敗北を余儀なくされた近代建築の研究者たちが、あかんかったなあというふうに肩を寄せ合いながら残念会をしている姿を見ると、そこそこ楽しそうなんです。彼らはひょっとしたら、敗北がもたらす惨めな連帯感をエンジョイするのが趣味になっているんじゃないかなと思いました。京都で保存して何の意味があるんだという問題に本気で向き合おうとしている人はいなかったと思います。

現在の景観条例に関していうと、確かに、いまどんどん建ちだしているホテルもだいたいグレー系統で色を整えて、高さもややおとなしめにしてはいますよね。ゆくゆくはあれで街並みができると考えているのかなとは思います。でもそうは、たぶんならないね。少なくとも、フィレンツェやシエナのような街には、ぜったいなりませんよ。

京都とは離れるけど、美しい街並みの一つだと思うものに、関西学院大学のキャンパスがあります。建物はみんなウィリアム＝メレル＝ヴォーリズの設計です。それ自体は大したことないんです。別に私はヴォーリズという人、そんなに腕の立つ建築家だとは思っていないです。でも、キャ

関西学院大学のキャンパス

ンパスに同じデザイナーのほぼ同じ時期の建物が並んでいる様子は、日本の他の大学にない美しさがあるんですよ。あれは残す値打ちがあるなと思います。神戸女学院なんかもそうです。同志社も良かったけど、若干崩れだしているかな。でも京大に比べたら遥かに整っていますよ。京大はどうしてああなってしまったんだろうね。

神戸女学院ですが、経営状態はあまり思わしくないんだそうです。そこで、あるシンクタンクに経営改善のアイデアを求めたんですよ。そのシンクタンクは、並んでいるあの既存の校舎を全部潰して超高層に建て替えろというんです。これには減価償却の問題が関わっています。税務署の判断で建物の値打ちは最大 30 年、ものによっては 40 年間くらいまで認めてくれるんだけど、そこまで来ると値打ちがなくなるんです。財産ではなくなるんですよ。鉄筋コンクリートでもたぶん 50 年くらいじゃないかな。これが減価償却です。つまり、何年か経ったら物件は事実上ゴミになるんですよ。少なくとも、経済に生きる人はゴミと判断するんです。私は神戸女学院の整ったキャンパスの景観を美しいと思うけれども、減価償却計算に立脚するエコノミストにしたら、ただのゴミ屋敷です。だから維持費だけかかる資産価値のない物件は撤去して、超高層ビルにしたほうがいいというのは理にかなっているんです。現代日本社会はそういう社会なんです。これは逆説的なんだけど、社会自体が建築の文化的な価値をほとんど評価しないおかげで、建て替えのチャンスに恵まれるんです。そのせいもあって、日本の建築家にはけっこう仕事があるんですよ。

観光と街並み

── ひとくちに京都といってもいろいろな場所があるはずなのに、現在の景観条例では、どの地域にもほぼ一律して規制が定められています。これには観光客のような外部から来る人が、京都に対して古都のイメージを漠然と持っているのと何か関連がある気がします。

井上 ── そうですね。必ずしも、住んでいる人の暮らしがそのまま建物の外に現れているわけではなく、観光上の思惑でつくられようとしているんじゃないか、という指摘ですね。私としては、観光上の思惑でつくられている部分はあっても、フィレンツェやベネチアなどに比べれば、そんなものは取るに足らないという反論をしたいような気がします。まちによってそれぞれ地域から醸し出される気配があって、これを具体化したいというような、そんなきめ細かな建築政策を京都市が持っているわけではありません。持ちようがないです。本気でそんな対応を確認申請の窓口がし始めたら、それはそれで大変ですよ。これは仏光寺では成り立つけれども、松原では困る、とかいうような。それはすばらしいキメの細かさだと私も思いますけど、現実的には無理だと思います。

── そういった景観政策によって、京大周辺独特のタテカンの景観もなくなってしまいました。

井上 ── タテカンに関していうと、僕はあまり京大生に同情的ではないんです。昔は良かったという話になりますが、1970 年代の立て看板は美しかったんです。各セクトにはそれぞれのデザインがあって、ゲバ文字のレタリングが輝いていたんですね。定規で線なんか引かずに職人芸で書いていくんですよ。いま、あの職人芸を伝承する組織はもう京大の中にはないと思います。いまは大勢の人に告知をするときにパソコンが使える時代です。電脳媒体で人の勧誘導員ができるにもかかわらず、あえて立て看板で訴えたいというのなら、それなりの美術心を見せてほしいと思うわ

けですよ。あんな下手くそな字なら、わざわざ立て看板にしなくていいだろうと思います。

どうしても出したいならキャンパスの中に限定しろ、という京都市に対しても違和感を抱きます。違和感があるのは、別に京都市自体があの立て看板で壊されてしまうような美しい街並みを持っていないんじゃないかということです。あのタテカンがあっても、そんなに街並みが壊れるわけじゃないと思います。百万遍や東一条あたりの景観は、そんなにデリケートじゃないですよ。京都を案内する英語のガイドブックには、街並み自体は大したことないアジアの普通のまちだと書いてあると聞きます。だからたぶん京都に行く人も、いわゆる街並みを求めているということはないと思います。

観光地としての京都

── それにもかかわらず、京都がいま、ヴェネチアなどと同じように観光で盛り上がり、ここまでもてはやされているのは、メディアのイメージ戦略のせいなのでしょうか。それがオーバーツーリズムの問題を引き起こしている部分もあると思います。

井上 ── もともと観光都市の側面はあったんだけど、20 世紀の前半くらいまでは、京都へ来る人の多くは仕事のためだったと思います。京都もある程度、産業都市だったんです。特に呉服が多かったんじゃないかな。染め、織り、塗りとかいうような、いまから見れば手工業だけれども、そういう産業がきわだつ都市だったと思います。だから来る人もおじさんが多かったんです。僕の実感でいうと、様子が変わってきたのは 1970 年代です。僕が住んでいたのは嵯峨なんだけど、目に見えて観光の若い女の人、ひとり旅の女の人が増えたんですよ。そのころ、京都をうたった流行歌がけっこうあったんです。失恋をした女の人が癒しを求めて京都へ来て嵐山で夕日を見るとか、しょうもない歌が多かったんだけどね。実際に社会の趨勢を反映していて、少なくとも嵯峨では女の人が目に見えて増えましたね。

あとは、1970 年に大阪万国博覧会があって、6500 万人を会場に動員したんです。半年で 6500 万人だから一ヶ月で 1000 万人、一日で 33 万人。甲子園球場は一日 4 万人です。この時期、当時の国鉄は本当に喜んでいました。新幹線は常に満員でした。ところが万国博覧会が終わると、新幹線の乗降客は一気に減るんですよ。このときに国鉄が打ち出したのが、ディスカバージャパンキャンペーンで、日本を見つめ直そうとかあおりたてて、万博の穴埋めをしようとしたんです。その最大のヒット商品が京都駅だったんですよ。あの万国博覧会がなかったらそれほど劇的に変わらなかったと思うけれども。

それ以前の手工業がらみのおじさんたちは、室町通の呉服問屋と取引の話が終わると、晩は祇園に行ったり上七軒に行ったり、ひょっとしたら島原に行ったり、要するに夜はエッチな遊びを求めていたんです。お伊勢参りというのが伝統的にあります。本当に伊勢信仰があって行った人もいたと思うけど、実際には伊勢神宮のすぐそばにある古市の遊郭回りをしていたんじゃないかな。

京都観光はおじさん用に組み立てられてたんですよ。だけどそれ以降、ひとり旅の女の人を受け入れる施設がどんどん整っていきました。京都観光のおじさんくさいところは、みるみるデオドラント化されていったと思います。『an・an』という女性雑誌が、70 年代は頻繁に京都特集を組んでいました。『an・an』を持ちながら、京都観光をするお姉さんがけっこういたんです。いまもそれが結局、国際化して続いているんじゃないかな。

井上章一氏（左から 2 人目）を囲んで

あとがき

絶えず変化を続け何かが抜け落ちていく都市の中で、何が真に遺されるべきなのだろうか、という問題意識からこのインタビューは始まった。京都は歴史的な都市とされながら、その実古くからの街並みが遺っている場所は少ない。中心部では中高層のビルが数多く建てられ、日本の他の都市とそう違わない景観が広がる。また観光客の急増による変化も激しく、京都市内の宿泊者数は2000年の942万人から2017年には1557万人まで増加している[3)]。至る所でホテルが建設され都市景観も大きく変化してきた。しかし交通渋滞やゴミ問題など「オーバーツーリズム」の問題があらわれると、ホテルの誘致に積極的だった京都市も「市民の安心安全と地域文化の継承を重要視しない宿泊施設の参入をお断りしたい」と宣言する[4)]に至っている。

そもそも京都の都市景観はどのようにつくられてきたのだろうか。井上氏へのインタビューでは、イタリアなどヨーロッパの人々と日本の人々の、都市や建築文化に対する意識の違いが論じられた。日本における統一的な街並みは権力者による統制の結果であるために、その街並みを盲目的に遺そうとする意識は人々にはなく、あくまで経済性を優先する。そんな日本においてヨーロッパの都市のように都市景観をコントロールすることは不可能に近い。現在、高さや色などについて景観条例である程度の規制を敷いてはいるが、それでも都市景観は雑多なものへと発散する方向に向かう。では、こうした状況の中で建築や都市はどうあるべきか。両氏へのインタビューを通して浮かび上がってきたのは、人々に共有された生活の型＝「モデル」というキーワードである。

ここでいう「モデル」とは、従来の都市開発において画一的に用いられてきたモデルではない。経済原理に基づくこのモデルは場所を問わずきわめて普遍的に適用され、「もの」としての建築や都市の形を定義してきたが、そこに景観条例で庇や格子といったパーツ単体を取って付けても何の意味も持たなければ、高さや色を規制することがまちのアイデンティティを決めるはずもない。我々が提示すべき「モデル」とは、都市において共有され得る生活の型であり、それとともにあらわれる建築や都市の形である。かつて京都には町家とその周囲のコミュニティによって形成されていた生活の型があった。例えば町家の開口部は、格子などを用いて採光を必要十分に取り入れ、見る／見られるの関係を高度に作り出す。これは密集都市において、難解なコミュニケーションを必要とする生活文化と合わせて形成された生活の形といえるだろう。

ではなぜ「モデル」が必要なのか。それは現在の京都を強く支配しているのが「イメージ」だからである。観光向けにつくられた「イメージ」を各人が都合よく解釈して、建物に限らずあらゆるものに当てはめてきた。その原因の一つは、京都の文化が時代ごと、場所ごとに複雑に根づいたものであり、それを保てといわれても、正しく解釈し具現化することが非常に難しいからだろう。ヨーロッパでは建築物に「変更を加えない」ことで都市固有のモデルを守ってきたが、京都ではむしろ都市で営まれる文化を遺していく戦略として「モデル」を提示する必要があるのだ。

「モデル」を提示している例として、建仁寺塔頭両足院が実践している、ホテルや茶室を現代的に活用するプロジェクトがまさにそうである。伊藤副住職は京都で遺されるべき生活の型を、「丁寧さ」や「縦軸と横軸」といったキーワードを用いて述べている。彼は「京都」という都市の文化と歴史を身をもって理解し、その変化を許容しながらどのように現在に応用するかを、ハード／ソフトの両面で我々に見せてくれる。

どれだけ時代が過ぎ去っていこうとも、その都度応用しうる揺るぎない文化と歴史があるはずだ。何が遺されるべきか、これは生活と「もの」をめぐる思想である。我々に求められているのは、失われつつある京都の生活を型として遺し、それが触発されるような建築を考えていくことではないだろうか。

---

1) 秦恒平 , 伊藤東慎 , 監修 井上靖 , 塚本善隆 (1976)『古寺巡礼 京都 建仁寺』淡交社 より引用
2) 監修 白幡洋三郎 (2008)『京都市今昔写真集』樹林舎 より引用（写真提供：南聿子氏）
3)『京都観光総合調査 平成 29 年（2017 年）』https://www.city.kyoto.lg.jp/sankan/cmsfiles/contents/0000240/240130/kyosa29saishu.pdf
4) 産経 WEST (2019.11.20)『京都市、宿泊施設の新規参入「お断り宣言」 急増で誘致方針転換』https://www.sankei.com/west/news/191120/wst1911200034-n1.html